

## 日本アメリカ史学会第 49 回例会報告

タイトル：「20 世紀前半のアメリカ合衆国におけるキリスト教と宗教的多元性と民主主義」

日時：2020 年 12 月 19 日（土） 2:30-5:30 P.M.

会議プラットフォーム：Zoom

参加者数：約 60 名

司会：佐々木一恵、李里花

### 趣旨：

アメリカ合衆国におけるキリスト教の伝道活動や社会改革運動に関しては、これまで白人プロテスタント宣教師や運動家の活動に焦点が当てられることが多かった。その背景には、主流派プロテスタントイズムが、リベラリズムや共和主義などと並び、アメリカ合衆国の多様な人々を「市民」として統合していく理念の役割を果たしてきたことがある。確かに、移民・非白人文化と結びついた宗教は、「反アメリカ的」要素として排斥されることも少なくなかった。またこうした状況は今なお続いている。そこには「マイノリティ」側の宗教実践を、オルタナティブ（対抗的）な公共圏の創出の試みと捉える、いわゆる「マジョリティ」側の不安や危機感を見て取ることもできるだろう。

今回のアメリカ史学会の例会では、移民に対する排他的な政策や黒人に対する人種隔離体制が進展した 20 世紀前半における、移民・黒人を対象とする／によるキリスト教の宗教的実践や思想を取り上げ議論していく。第一報告者の山崎氏はカトリック教会の事例を、第二報告者の黒崎氏は黒人教会の事例を、第三報告者の吉田氏は日系移民プロテスタントの事例をお話いただく。またコメンテーターに藤本氏を迎え、三者の報告をもとに、宗教という情動や親密圏とも密接に連動しかつ公共圏にも影響を及ぼす実践と、アメリカ合衆国の民主主義との関係についても議論していきたい。

### 報告要旨

山崎 由紀（敬和学園大学）

「世紀転換期のアメリカ・カトリック教会——NCWC 設置と存続をめぐる『移民の教会』の諸問題」

#### 報告要旨：

世紀転換期のアメリカカトリック教会では、19 世紀のカトリック国からの大量移民の流入を受け、移民のアメリカへの定着とアメリカ国内でマイノリティであるカトリック教会が維持すべき姿をめぐる議論が教会内対立を生んだ。教会は移民らにプロテスタントが主流であるアメリカ社会への同化を促すべきか。カトリック教会の持つヨーロッパ的価値観を

堅持すべきか。本発表では、第一次大戦期に創設された司教協議会の常設化にあたってローマ教皇庁から向けられた疑義をめぐり、「移民の教会」であるアメリカカトリック教会が目指した姿を論じる。

黒崎 真 (神田外国語大学)

「交差する宗教と人種のアイデンティティ——1910～30年代の黒人教会と『カルト』教団」

報告要旨：

世紀転換期から1930年代にかけて白人支配を強化したものは、科学的人種主義に加え宗教ヒエラルキーであった。宗教と人種は交差し、黒人キリスト教は白人キリスト教からは非標準とみなされ、キリスト教以外の黒人宗教は逸脱とみなされた。この文脈のなかで、黒人側にも宗教に基づく人種アイデンティティを模索・創造する多様な動きが起こる。特に北部都市では、黒人教会の一部は人種正義に焦点をあてる社会的福音を唱え人種向上を目指す一方、一部は奴隷宗教の礼拝形式を維持する。他方、「カルト」教団は、キリスト教を捨て、それぞれの教義に基づく人種アイデンティティを構築していく。本報告では、1910年代から30年代にかけて、公権力とも結びついた白人支配の公共圏が形成されるなか、黒人側にも宗教に基づく人種アイデンティティを模索・創造する対抗的な公共圏（複数が競合、親密圏と連動）が創出されていく様子に光をあてる。

吉田 亮 (同志社大学)

「20世紀前半期、アメリカ日系移民プロテスタントと『多元的キリスト教』の形成」

報告要旨：

本発表ではアメリカ日系移民プロテスタントが20世紀前半期に提唱した「多元的キリスト教」の背景、特徴を、「越境性」をキーワードに論じる。ここでいう「多元的キリスト教」とは、日系移民が越境的資本（日本プロテスタントの文化・社会資本）を活用し、移民自身の主体性を重視し、脱人種主義、土着主義を主張するキリスト教観を意味する。特に、1910年代のカリフォルニア、1940年代のニューヨークにおける移民世代の日系プロテスタントの事例を重点的に取り上げる。

各発表の後、コメンテーターの藤本龍児（帝京大学）より、るつぼ論から文化多元主義、多文化主義に至る同化・統合理論の展開と「多様の統一」の核になるものを検討する必要性が指摘され、公共圏とマイノリティが作り出す対抗的公共圏とをつなぐものは何であったかなどに関するコメントがなされ、フロアとの質疑応答が行われた。